

〈新刊紹介〉

阿久澤忠著

『平安時代語の仮名文研究』

本書は、平安期の仮名文について、語彙・語法、文字・表記、文章展開という3つの側面から論じた書である。著者のこれまでの論考を加筆修正してまとめられた。本書は、新典社研究叢書第288巻として刊行された。

本書の構成は次の通りである。「第一部 語彙・語法の面から」には、「第一章 貝の力——源氏物語の「かひあり」——」、「第二章 源氏物語の「ひねもすに」と「陵園妾」の「盡日」」、「第三章 源氏物語の「はんべり」——中世の発音——」、「第四章 源氏物語の敬語表現「おほえたまふ」」、「第五章 源氏物語の人物呼称」、「第六章 枕草子の「とぶらふ」——なぜ犬が犬を「とぶらふ」のか——」、「第七章 歌語「嘆き」の消長」。「第二部 文字・表記の面から」には、「第一章 土左日記の漢字使用」、「第二章 土左日記の「すみのえ（江）」、「第三章 伊勢物語の「うら山しくも」」、「第四章 源氏物語の「しげ木のなか」」、「第五章 更級日記の「人」と「ひと」」、「第六章 更級日記の「月なう」——形容詞「つきなし」——、「第七章 『拾遺愚草』の「あか月」（暁）」。「第三部 文章展開の面から」には、「第一章 源氏物語の文脈と文体」、「第二章 橋姫の巻「御前にて失はせ給へ」は誰の言葉か」、「第三章 浮舟の巻の文章展開——古今集「哀傷歌」との関係——」、「第四章 源氏物語の俳諧——講諧歌・物名歌の引歌表現——」、「第五章 源氏物語の物名歌の表現」、「第六章 暁の月——手習の巻「暁に到りて月徘徊す」——」、「第七章 更級日記、最終歌の表現——浮舟とのかかわり——」が含まれる。末尾に、「本書と既発表論文との関係」、「あとがき」、「索引」が付く。

(2016年10月18日発行 新典社刊 A5判縦組み 440頁 12,600円+税 ISBN 978-4-7879-4288-3)

服部隆著

『明治期における日本語文法研究史』

本書は、明治時代における日本語文法研究史を対象とした研究書である。品詞論、活用研究、「語」「句」「節」といった文法の単位、さらに文法用語の変遷を取り上げ、明治時代の日本語文法研究に伝統的国語研究と西洋文典がどのように取り入れられているかを論じている。本書は、ひつじ研究叢書〈言語編〉第146巻として刊行された。

本書の構成は次の通りである。「序章 明治期日本語文法研究史の方法」に続き、「I 明治期日本語文法研究史の全体像 1 明治時代の品詞論とその源流」に「第1章 品詞分類における伝統的国語研究と西洋文典の利用」、「第2章 明治前期のテニヲハ観 助

詞の定義と下位分類を中心に」、[第3章 明治時代の形容詞・形容動詞論 品詞の定義と語の認定法の観点から]、[第4章 明治時代の活用研究]、[第5章 明治期の日本語研究における時制記述]。「Ⅱ 明治期日本語文法研究史の全体像2 明治時代の統語論における単位の設定」に「第1章 「語」の単位認定」、[第2章 「準用」論の展開]、[第3章 明治時代の「文の成分」論]、[第4章 統語論におけるクローズ（節）の扱い]。「Ⅲ 明治期日本語文法研究史の種々相」に「第1章 西周の文法研究 「ことばのいしずゑ」と西周文書「稿本（四）」の関係をを中心に」、[第2章 西周の文法研究における「句（sentence）」]、[第3章 松下文法の単語観 三矢重松・清水平一郎との関係から]、[第4章 松下文法に与えた山田文法の影響]、[第5章 文法用語の変遷1 「品詞」ということば]、[第6章 文法用語の変遷2 「主語」と「述語」を収め、「終章」へ続く。末尾に「謝辞」、[「初出一覧」]、[「参考文献一覧」]、[「〈本書で調査・引用した〉日本語文典、蘭・英文典、その他同時代資料書目」]、[「索引」]を付す。

なお、本書はJSPS平成28年度科学研究費助成事業研究成果公開促進費（課題番号16HP5058）による助成を受けて刊行されたものである。

（2017年2月17日発行 ひつじ書房刊 A5判縦組み 587頁 6,800円+税 ISBN 978-4-89476-837-6）

秋山英治著

『愛媛県東中予方言のアクセントと共通語のアクセント
——日本語史再建のために——』

本書は、これまでまとまった成果のなかった愛媛県東中予地方のアクセントの全体像を見出すことを目的に、近畿・四国地方の京阪系諸方言アクセントの史的変遷の考察と、愛媛県から広島県に分布する「東京式アクセント」「京阪式アクセント」成立過程の検証を通し、日本語諸方言アクセントの史的変遷について論じた書である。

本書の構成は次の通りである。「はじめに」に続き「第1章 序論」には、「第1節 方言区画と愛媛方言」、[第2節 愛媛方言のアクセント研究史]。「第2章 愛媛県東中予方言アクセントの記述的研究」には、「第1節 松山市方言のアクセント体系と音調」、[第2節 松山市方言の体言のアクセント]、[第3節 松山市方言の用言のアクセント]、[第4節 松山市方言の〈式〉]、[第5節 松山市方言の外来語のアクセント]、[第6節 松山市方言の駅名のアクセント]、[第7節 松山市興居島方言のアクセント]、[第8節 旧、北条市方言のアクセント]、[第9節 今治市方言のアクセント]、[第10節 今治市方言の駅名のアクセント]、[第11節 四国中央市方言の駅名のアクセント]。「第3章 愛媛県東中予方言アクセントの歴史的研究」には、「第1節 「中央式」アクセントと「讃岐式」アクセント——東中予地方における分布と変遷——」、[第2節 移住者のアクセント——「中央式」から「内輪式」へ——]。「第4章 共通語のアクセント」には、「第1節 NHK編『日本語発音アクセント辞典』における外来語のアクセント」、[第2節 『明

解日本語アクセント辞典』における外来語のアクセント」。また、「資料編」には、各方言の凡例（①松山市方言、②松山市興居島方言、③旧、北条市方言、④今治市方言、⑤国道11号線沿線地域（東温市重信町方言～新居浜市方言））が記される。末尾には「参考文献一覧」、「初出一覧」、「あとがき」、「索引」が付く。

（2017年2月20日発行 おうふう刊 A5判横組み 608頁 16,000円+税 ISBN 978-4-273-03781-9）

佐藤貴裕著

『節用集と近世出版』

本書は、書肆や出版機構に目を向け、出版史を基盤としながら近世節用集を捉えようとする書である。本書は、和泉書院研究叢書第484巻として刊行された。

本書の構成は次の通りである。「第一部 近世節用集の展開」には、「一 近世節用集史の概要」、「二 展開システムとしての「典型」と「逸脱」」。 「第二部 版權問題各論」には、「一 『合類節用集』『和漢音釈書言字考節用集』における版權問題」、「二 近世節用集の類版——その形態と紛議結果——」、「三 早引節用集の危機——明和元年紛議顛末——」、「付説 「出勤帳」の欠落について」。 「第三部 『錦囊万家節用宝』考」には、「一 合冊という形式的特徴を中心に」、「二 不整合の解釈」、「三 合冊の背景」。 「第四部 版權問題通覧」には、「一 元禄・元文間」、「二 宝暦・明和間」、「三 安永・寛政間」、「四 享和・文化間」、「五 文政・天保間」、「六 嘉永・明治初年間」。 また、付録には「近世節用集刊行年表稿」。 末尾に「参考文献」、「おわりに」、「本文要語索引」が付く。「おわりに」には既発表論文との関連も示される。

なお、本書はJSPS平成28年度科学研究費助成事業研究成果公開促進費（課題番号16HP5067）の助成を受けて刊行された。

（2017年2月20日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 360頁 8,000円+税 ISBN 978-4-7576-0826-9）

藤本灯・田中草大・北崎勇帆編

『山田孝雄著『日本文体の変遷』——本文と解説——』

本書は、長らく未刊のままであった山田孝雄の自筆稿本『日本文体の変遷』を翻字し注記を加え、詳細な解説と索引を付し刊行したものである。山田孝雄の著作においては数少ない文体を主題にしたものであり、貴重である。

本書の構成は次の通りである。「導言」、「凡例」に続き、「第一冊」に「第一章 緒論」、「第二章 古代の詞章」、「第三章 上代の漢文」、「第四章 史部の文」、「第五章 宣命体」、「第六章 純万葉仮名の文」、「第七章 上代に於ける漢文体の消息」、「第八章 仮名文の創始」。 「第二冊」に「第九章 仮名消息文の発展」、「第十章 中世の記録体及び往来体の文」、「第十一章 仮名交りの文の成立」、「第十二章 和漢混淆文」、「第十三章 候文」、「第十四章 仮名消息系統の候文」、「第十五章 言文二途の端緒」、「第十六章

芳野朝時代、室町時代の文体概観」。「第三冊」に「目次」,「第十七章 江戸時代文体の概観」,「第十八章 江戸時代の公私の日用文体」,「第十九章 江戸時代の普通の文体」,「第二十章 江戸時代の特殊の文体」,「第二十一章 明治時代及其後の文体」を収め、さらに「解説」,「附録 未定稿『院政鎌倉時代文法史』『院政鎌倉時代の語法』」が続く。末尾に「後記」,「書名・資料名索引」,「人名索引」,「語彙索引」,「要語索引」を付す。

なお、本書は平成 27 年度新村出記念財団刊行助成及び JSPS 平成 28 年度科学研究費助成事業研究成果公開促進費(課題番号 16HP5073)による助成を受けて出版された。(2017 年 2 月 20 日発行 勉誠出版刊 A5 判縦組み 287 頁 5,900 円+税 ISBN 978-4-7710-2792-3)

岸本恵実解説, 三橋健書誌解題

『フランス学士院本 羅葡日対訳辞書』

本書は、日本語とヨーロッパの言語の対訳辞書で現存する最古のものであり、またキリシタン資料としても現存する最初の辞書である羅葡日対訳辞書の版本のうち、フランス学士院図書館所蔵の「学士院本」のマイクロフィルムをもとにした影印に、詳細な解説と書誌解題を付し刊行したものである。「学士院本」は基本的には学士院会員しか披見が許されないとされており、先に刊行されている他の 2 本の影印と合わせてさらなる比較対象を可能にする、貴重な資料である。

本書の構成は次の通りである。「凡例」が示された後、ページ番号を付した 1000 ページに及ぶ影印を収め、「解説」,「書誌解題」が続く。さらに末尾に「参考文献目録」が付く。

(2017 年 2 月 25 日発行 清文堂出版刊 A5 判縦組み 364 頁 4,500 円+税 ISBN 978-4-585-28032-3)

林直樹著

『首都圏東部域音調の研究』

本書は、首都圏東部域を中心としたフィールドワーク調査によって得られた当該地域の音調の変化や、「型」だけではとらえきれないあいまい性について考察した書であり、著者の博士論文をもとに加筆修正したものである。

本書の構成は次の通りである。「はじめに」,「凡例」,「序章」に続き、「第 1 部 東京東北部アクセントの多角的分析」には、「第 1 章 東京東北部のアクセント——2 拍名詞における音調実態と年層差・地域差——」,「第 2 章 東京東北部高年層 2 拍名詞アクセントの実態」,「第 3 章 東京東北部アクセントの分類とその変化プロセス——クラスター分析を用いた話者分類結果から——」。「第 2 部 音響的特徴からみたあいまいアクセントと明瞭アクセントの関係性——首都圏東部域を中心として——」には、「第 1 章 アクセントの「あいまい性」を捉えるための音響的指標の検討と分析データの構築——首都圏東部域を中心として——」,「第 2 章

音響的特徴からみた明瞭アクセント・あいまいアクセントの関係性——下降幅と相対ピーク位置を指標として——, 「第3章 音響的特徴によるアクセントの型区別・ゆれの把握——語間距離・語内距離を用いた検討——」, 「第4章 首都圏東部域アクセントの「あいまい性」・「明瞭性」——音響的指標に基づく分類結果から——」。「終章」のあと, 「引用文献」, 「初出一覧」, 「あとがき」, 「英文要旨」, 「索引」が付く。

なお, 本書は JSPS 平成 28 年度科学研究費助成事業研究成果公開促進費 (課題番号 16HP5057) の助成を受けて刊行された。

(2017 年 2 月 28 日発行 笠間書院刊 A5 判横組み 204 頁 3,500 円+税 ISBN 978-4-305-70832-8)

中里理子著

『オノマトペの語義変化研究』

本書は, 和語と漢語の関わりに目を向け, 周辺語彙と意味の関わりという視点からオノマトペの語義変化について論じた書である。本書は著者が平成 26 年度に提出した博士論文「明治・大正期の小説作品に見るオノマトペの語義変化とその要因——和語と漢語の関わりを中心に——」に基づいている。

本書の内容は以下の通りである。「まえがき」, 「序章」に続き, 「第1章 オノマトペの捉え方と意味に関する先行研究」には, 「1. はじめに」, 「2. オノマトペの捉え方と名称の変遷」, 「3. 和語系オノマトペと漢語系オノマトペに関する研究」, 「4. 本研究で行う語義変化研究の立場」。「第2章 小説作品に見るオノマトペの語義変化」には, 「1. はじめに」, 「2. オノマトペの多義の解消——「まじまじ」を例に——」, 「3. オノマトペの語義の縮小——「わくわく」を例に——」, 「4. 周辺語彙との関連——「うっとり」「うっかり」を例に——」, 「5. 本章のまとめと考察」, 「補節 オノマトペにおける音と意味の関連——隣接するオノマトペの意味の重なり——」。「第3章 小説作品に見る和語系オノマトペと漢語系オノマトペの関わり」には, 「1. はじめに」, 「2. 明治期の漢語」, 「3. 明治前期の和語系・漢語系オノマトペの関係」, 「4. 明治後期の和語系・漢語系オノマトペの関係」, 「5. 和語系オノマトペの音韻・形態面での影響」, 「6. 本章のまとめと考察」。「第4章 小説作品に見る文章の近代化とオノマトペの変遷」には, 「1. はじめに」, 「2. 「泣く」, 「涙」に関する描写の変遷」, 「3. 「笑い」に関する描写の変遷」, 「4. 本章のまとめと考察」。「終章」には, 「1. 本研究の概要」, 「2. 結論」, 「3. 今後の課題」。末尾に「引用・参考文献」, 「あとがき」, 「索引」が付く。

なお, 本書は JSPS 平成 28 年度科学研究費助成事業研究成果公開促進費 (課題番号 JP16HP5074) の助成を受けて刊行された。

(2017 年 2 月 28 日発行 勉誠出版刊 A5 判横組み 272 頁 7,000 円+税 ISBN 978-4-585-28030-9)

乾善彦著

『日本語書記用文体の成立基盤——表記体から文体へ——』

本書は、古代日本語においてことばの表記方法の変遷と成立を論じた研究書である。古代漢字専用時代の資料を「表記体」と捉える視点を採用し、漢文訓読から変体漢文を経て仮名という日本語書記用文体が生まれる過程について論じている。

本書の構成は次の通りである。「第一章 文字と「ことば」」に「第一節 文字と「ことば」の対応関係」,「第二節 古代日本語の書記システム」。「第二章 ウタの仮名書と万葉集」に「第一節 漢文中のウタ表記の展開」,「第二節 歌木簡の仮名使用」,「第三節 仮名の成立と万葉集「仮名書」」,「第四節 万葉集「仮名書」歌巻論」,「第五節 巻十九のウタ表記と仮名書」,「第六節 巻十八の補修説と仮名使用」,「第七節 万葉集「仮名書」歌巻の位置」。「第三章 古事記の表記体と「ことば」」に、「第一節 古事記の音訓交用と会話引用形式」,「第二節 古事記の固有名表記(1) 神名・人名」,「第三節 古事記の固有名表記(2) 地名」,「第四節 古事記の表記体と訓読」,「第五節 古事記を構成する「ことば」」。「第四章 変体漢文体表記から和漢混淆文体へ」に「第一節 部分的宣命書きと和漢混淆文」,「第二節 変体漢文の漢文的指向」,「第三節 変体漢文から和漢混淆文へ」,「第四節 三宝絵と和漢混淆文」,「第五節 表記体の変換と和漢混淆文」を収める。末尾に「あとがき」,「索引」が付く。

(2017年3月15日発行 塙書房刊 A5判縦組み 388頁 12,000円+税 ISBN 978-4-8273-0126-7)

蜂矢真郷編

『論集 古代語の研究』

本書は、古代語を対象にした最新の研究成果を収録した論文集であり、蜂矢真郷氏が古希と定年を迎えたことを機に編まれたものである。大きく「古代語の語構成・文法・語彙」と「古代漢字文献」の2つの分野にまとめられており、幅広い研究が取り上げられている。

本書の構成は次の通りである。「はしがき」に続き、「第一部 古代語の語構成・文法・語彙」に「動詞の活用の成立——木田章義氏「二段古形説」をめぐって——(蜂矢真郷)」,「『日本語歴史コーパス』を利用したジャンル別特徴語の抽出とその周辺(村田菜穂子)」,「ミ語法における節の形成と意味(竹内史郎)」,「ナを伴う二音節化名詞(蜂矢真弓)」,「上代・中古の動詞「～カフ」・「～ガフ」(中垣徳子)」。「第二部 古代漢字文献」に「『日本書紀』における高句麗、百濟、新羅の官職名(柳玫和)」,「前田本『日本書紀』の日・朝固有名詞の声点について(朴美賢)」,「『日本書紀』の分注——〈倭義注〉とその偏在から考える——(是澤範三)」,「『日本書紀』古訓「ウカラ」「ヤカラ」考(金紋敬)」,「御巫本『日本書紀私記』の和訓の系統——峯本との関係を中心に——(山口真輝)」,「『五国史』宣命の「之」字(池田

幸恵)、「変体漢文における不読字——段落標示用法を中心に——(田中草大)」、「『和名類聚抄』の「玉類」項について(吉野政治)」の各論文を取める。末尾に「蜂矢真郷教授略歴」、「蜂矢真郷教授論著目録」、「あとがき」が付く。

(2017年3月19日発行 清文堂出版刊 A5判縦組み 315頁 9,200円+税 ISBN 978-4-7924-1063-6)

蜂矢真郷著

『古代地名の国語学的研究』

本書は、和名類聚抄の廿巻本に掲載されている地名について、主に文字・表記の面から考察した書であり、和泉書院研究叢書第487巻として刊行された。

本書の構成は次の通りである。「はしがき」に続き、「第一篇 和名抄地名の構成と表記」には、「第一章 和名抄地名の構成」、「第二章 和名抄地名の二合仮名」、「第三章 和名抄地名の読添え」、「第四章 和名抄地名の音訓混用」。「第二篇 和名抄地名の訓注」には、「第一章 和名抄地名の訓注の仮名」、「第二章 和名抄地名の訓注の促音・撥音等」。「第三篇 地名の二文字化」には、「第一章 三字地名の二文字化」、「第二章 一字地名の二文字化」、「第三章 和名抄地名における「部」」。「第四篇 地名とその周辺」には、「第一章 和名抄・名博本の地名の傍訓」、「第二章 風土記地名と和名抄地名」、「第三章 地名と上代特殊仮名遣」、「第四章 チ[路]とミチ[道]」。末尾に「あとがき」、「索引(地名索引・語彙索引・事項索引)」、「地図名索引」が付く。「あとがき」には既発表論文との関連も示される。

(2017年3月31日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 376頁 10,500円+税 ISBN 978-4-7576-0832-0)

国語語彙史研究会編

『国語語彙史の研究 36』

小特集としてオノマトベに関わる論考が集められる。本書の構成は次の通りである。まず、小特集には、「擬音語の史的推移——動物の鳴き声を中心に——(山口仲美)」、「狂言のオノマトベ、その必然性・伝承性・当代性(小林千草)」、「オノマトベ「ほくほく」の意味変化(小野正弘)」、「『画咄当時梅』のオノマトベと片仮名表記(乾彦彦)」、「マンガの象徴詞——萩尾望都『ルルとミミ』を手がかりとして——(前田富祺)」、「「ひいやり・ふうわり」型から「ひんやり・ふんわり」型へ(岡島昭浩)」が収められる。

その他の論考には、「ツマ[妻・夫]とトモ[友・伴](蜂矢真郷)」、「『万葉集』大伴家持の鷹歌・鷹言葉——「蒼鷹」について——(三保忠夫)」、「上代・中古のハフ型動詞(中垣徳子)」、「中世古記録に於ける唐末・五代・宋の中国口語の影響について(堀畑正臣)」、「狂言台本における聾啞態語彙表記の変容(末森明夫・高橋和夫)」、「近世以降における「ヤル」の多義性と〈行為をする〉用法の成立(豊田圭子)」、「近世長崎文献より見る接続詞バツテンの成立について(前田桂子)」、「『英華和譯字典』の語積をめぐって(今

野真二)], 『『航米日録』の表現と語——仙台市博物館蔵本に見える推敲のあとをたどって——(浅野敏彦)], 『月経を表す「手桶番」の語源——上方落語『鮑のし』の語源説を起点として——(竹村明日香)], 『「近々」の語誌(山際彰)』。末尾に「語彙索引」, 「人名・書名・事項索引」が付く。(2017年3月31日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 336頁 10,000円+税 ISBN 978-4-7576-0837-5)

今野真二著

『かなづかい研究の軌跡』

本書は、特に過去の日本語の研究において重要な位置を占めてきた「かなづかい」について、国語学、日本語学がどのように取り扱ってきたのかを検討する書である。大野晋、安田章、亀井孝の論文を1つずつ取り上げ、その論を詳細に追いつつ筆者の考えが展開されていく点が特徴的である。

本書の構成は次の通りである。「はじめに」に続き、「序章 論の継承と展開」, 「第1章 大野晋「仮名遣の起原について」——カノンとしての定家——」, 「第2章 安田章「吉利支丹仮字遣——二つの「modo」——」, 「第3章 亀井孝「準かなづかい、をめぐる動揺くさぐさ」——「準かなづかい」を精査する——」を収め、末尾に、「あとがき」, 「索引」が付く。(2017年4月10日発行 笠間書院刊 A5判縦組み 204頁 2,800円+税 ISBN 978-4-305-70843-4)

大木一夫著

『文論序説』

本書は、文法論において重要な単位である「文」とは何かという問題について、現代日本語の様々な言語現象の分析を通して論じた研究書である。文を言語行為の観点から考えることの重要性を示し、時間表現の詳細な記述と分析を行っている。本書は、ひつじ研究叢書〈言語編〉第144巻として刊行された。

本書の構成は次の通りである。「緒言」に続き、「序章 文について考える」, 「I 文はどのように考えられてきたか」, 「II 文論への視座」, 「III 文成立の意味的側面」, 「IV 認識する文」, 「V 事態を描き出す文」, 「VI 事態を描かない文」, 「VII 文成立の外形的側面」, 「VIII 文の機能の問題圏」, 「IX 主観性」, 「X モダリティ」, 「XI 喚体句」, 「XII 現代日本語「た」の意味」, 「XIII 現代日本語動詞基本形の時間的意味」, 「XIV 述定の時間・装定の時間」, 「終章 さしあたっての締括り」を収める。末尾に「注」, 「後記」, 「著者本書関連著述目録」, 「事項索引」, 「人名索引」, 「書名論文名索引」が付く。(2017年5月8日発行 ひつじ書房刊 A5判縦組み 473頁 8,400円+税 ISBN 978-4-89476-822-2)

奥村悦三著

『古代日本語をよむ』

本書は、古代日本語の文字資料、特に現代とは異なる表記体系・文字の取り扱い方に

関する入門書であり、筆者がこれまで古代の文献・資料の「よみ」を主題に執筆した論文を収録し、全体に関するまとめの論文を加えたものである。

本書の構成は次の通りである。「まえがき」,「本書の編集方針について一初出一覧」,「各章扉所載の図版について一各資料の概説」に続き,「第一章 話すままに書かれたもの——仮名文を読み解く——」に「1 仮名文書の成立以前」,「2 仮名文書の成立以前 続——正倉院仮名文書・乙種をめぐって——」。「第二章 語られるために書かれたもの——宣命書きを訓み下す——」に「1 「宣命体」攷」,「2 文を綴る,文を作る」。「第三章 読まれるように書かれたもの——漢文を和文に移す——」に「1 書かれたものから,語られたものへ」,「2 話すことばへ」,「第四章 日本語は漢字でどう書かれているか——漢字を和語でどうよむか——」に「古代日本語をよむ」を収める。末尾に「注」,「あとがき」が付く。

(2017年5月10日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 226頁 3,200円+税 ISBN 978-4-7576-0838-2)

田中章夫著

『東京ことば——その過去・現在・未来——』

本書では、南関東一円に生まれつつある「首都圏言葉」というべき共通のことばを「標準日本語」と位置付け、東京語系の「標準語」とは異なるその変遷をたどる。研究者のみならず幅広い層に向けられた、新たな東京ことばを捉える書である。

本書の構成は次の通りである。「まえがき」,「I 「あづま言葉」の原風景」,「II 東西言語圏の成立」,「III 江戸言葉の諸相」,「IV 東京語の芽生え」,「V 東京語の文明開化」,「VI 教科書言葉・小説言葉」,「VII 山の手ことば・下町ことば」,「VIII 東京語圏の拡張と変容」,「あとがき」,「江戸から東京へ——言葉の記録——」,「図表一覧」,「索引」。

(2017年5月10日発行 武蔵野書院刊 四六判縦組み 200頁 1,800円+税 ISBN 978-4-8386-0472-2)

小林隆・川崎めぐみ・澤村美幸・椎名渉子・中西太郎著

『方言学の未来をひらく——オノマトベ・感動詞・談話・言語行動——』

本書は、方言学において多くの可能性を有するテーマといえるオノマトベ、感動詞、談話、言語行動を取り上げ、それらの理論的背景と研究の実践を網羅した指南書である。初学者のための教科書の要素を織り込みながらも、詳細な分析方法を提示し、実践的な内容をめざす。各章は、「1. 研究史と課題」,「2. 方法と資料」,「3. 研究の実践 (1) ——記述的研究——」,「4. 研究の実践 (2) ——地理的(・社会的)研究——」,「5. 調査項目案」という五つの節で構成されている。

本書の構成は次の通りである。「はじめに」に続き,「序: 方言学の新分野——本書へのナビゲーション—— (小林隆)」,「第1章 オノマトベの方言学 (川崎めぐみ)」,「第2章 感動詞の方言学 (小林隆・澤村美幸)」,「第3章 談話の方言学 (椎名渉子・小林隆)」,「第4章 言語行動の方言学 (中西太郎)」,「あとがき」,「索引」。

(2017年5月13日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 424頁 5,800円+税 ISBN 978-4-89476-852-9)

大西拓一郎編

『空間と時間の中の方言——ことばの変化は方言地図にどう現れるか——』

本書は、方言で発生した言語変化はどのようなかたちで分布に現れるのかという点を中心課題とし、進められていた課題研究（国立国語研究所共同プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査（平成22～27年度、研究代表者：大西拓一郎）」、JSPS科学研究費基盤研究（A）「方言分布変化の詳細解明——変動実態の把握と理論の検証・構築——（課題番号23242024、平成23～27年度、研究代表者：大西拓一郎）」）の成果をまとめたものである。

本書の構成は次の通りである。「第Ⅰ部 方言分布形成論」には、「第1章 言語変化と方言分布——方言分布形成の理論と経年比較に基づく検証——（大西拓一郎）」、「第2章 「接触」による方言分布形成——（日高水穂）」、「第3章 言語的発想法と方言形性——オノマトベへの志向性をもとに——（小林隆）」。「第Ⅱ部 方言分布の実時間比較」には、「第1章 準体助詞の分布と変化（福嶋秩子）」、「第2章 日本語敬語の多様性とその変化（中井精一）」、「第3章 推量表現形式の分布とその変化——地域共通形式への収斂と脱推量形式化——（船木礼子）」、「第4章 九州地方の可能表現（松田美香）」、「第5章 中国地方における一段動詞の五段動詞化——活用体系の平準化における停滞・阻害の事例として——（小西いずみ）」、「第6章 大井川流域における言語変化——30年前の調査結果との比較から——（木川行央）」、「第7章 大井川流域の言語——経年調査から言葉の広がりをたどる——（太田有多子）」、「第8章 新潟県北部に残存するガ行入り渡り鼻音の実相と分布——代表2地点の世代別調査による経年比較——（大橋純一）」、「第9章 蛇の目と波紋——野草や小動物の方言を例に——（大西拓一郎）」。「第Ⅲ部 方言分布比較の方法と考え方」には、「第1章 方言分布の実時間比較と見かけ時間比較（岸江信介）」、「第2章 グロットグラム調査データの実時間比較（半沢康）」、「第3章 現代日本語の共通語化過程——『日本語言語地図』『全国中学校言語使用調査』との比較——（樋水兼貴）」、「第4章 言語変化と中心性——経年比較に基づく中心性の検証——（大西拓一郎）」。末尾に「索引」が付く。

(2017年5月15日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 360頁 7,400円+税 ISBN 978-4-254-51052-2)

田和真紀子著

『日本語程度副詞体系の変遷——古代語から近代語へ——』

本書は、古代語から近代語への移行における程度副詞の体系の変遷から、日本語の変化の実態を捉えようとする研究書である。特に古代語における「いと」のような高程度の副詞を取り上げ、各時代における共時的な体系の記述と、それぞれの体系がどのように変化していったのかに関する記述を提示しており、通時の変化を取り扱うために「発見的な程度副詞」「評価的な程度副詞」という分類を用いている点が特徴的である。

本書の構成は次の通りである。「はしがき」, 「序章 副詞研究の流れと程度副詞体系」に続き, 「Ⅰ 古代語から近代語へ—高程度を表す副詞の体系の変遷—」に「第一章 評価的な程度副詞の成立と展開」, 「第二章 高程度を表す副詞の体系変遷概観」。「Ⅱ 過渡期の諸相・一—評価的な程度副詞を中心とした体系の成立背景—」に「第三章 中世後期から近世初頭の高程度を表す副詞の体系」, 「第四章 成立過程から見た高程度を表す評価的な程度副詞の特徴—「チカゴロ」を例として—」, 「第五章 古語と口語のはざまにある『天草版平家物語』の語法—「コトノホカ」「モッテノホカ」の用法をめぐって—」。「Ⅲ 過渡期の諸相・二—高程度を表す評価的な程度副詞の特徴—」に「第六章 古代語近代語過渡期の代表的な高程度を表す副詞「アマリ(ニ)」」, 「第七章 感動詞・応答詞と評価的な程度副詞との連続性—大蔵虎明本における「ナカナカ」の分析を中心に—」。「Ⅳ 現代語への一步—高程度を表す副詞の二系統化—」に「第八章 近世前期上方語における高程度を表す副詞の体系」, 「第九章 〈程度の甚だしさ〉と〈多量〉を表す近世前期上方語の「タント」を収める。末尾に「まとめ」, 「引用参考文献」, 「既発表論文と章との関係」, 「あとがき」, 「索引(事項・語句・資料名)」が付く。

なお、本書は平成 29 年度清泉女子大学出版助成金の交付を受けて刊行されたものである。

(2017 年 5 月 26 日発行 勉誠出版刊 A5 判縦組み 254 頁 6,000 円+税 ISBN 978-4-585-28033-0)

山田進著

『意味の探究』

本書は、意味、特に語の意味論に関する筆者の研究をまとめた書である。様々な語・表現の意味論的分析に加え、意味とは何かという本質的な問題と「類義性」や「意義素」といった意味論に関する基本的な概念の詳細な検討が提示されており、さらに辞書における意味記述にも 4 章を割いて論じている点が特徴的である。

本書の構成は次の通りである。「序章 ことばの意味とその研究」に続き, 「第Ⅰ部 意味の本質」に「第 1 章 固有名詞と意味」, 「第 2 章 見せかけの意味要素」, 「第 3 章 意味と概念とをめぐって」, 「第 4 章 「丸い三角形」はどこがおかしいのか」, 「第 5 章 語の意味特徴の性格」, 「第 6 章 語の形式と意味」, 「第 7 章 事物・概念・意味」。「第Ⅱ部 同義・類義・多義」に「第 8 章 同義に関する二三の問題」, 「第 9 章 類義語とはどのような語か」, 「第 10 章 類義語の存在理由」, 「第 11 章 多義の処理—格助詞「で」の場合—」, 「第 12 章 多義語の意味記述についての覚え書き」。「第Ⅲ部 意味記述の方法」に「第 13 章 言語普遍の意味特徴による語彙記述」, 「第 14 章 語の意味はどのようなことばで記述できるのか」, 「第 15 章 感情の言語表現—予備的考察—」, 「第 16 章 感情語の意味をどう記述するか」, 「第 17 章 意義素分析の歴史と現状」。「第Ⅳ部 辞書と意味記述」に「第 18 章 辞書の意味記述」, 「第 19 章 意味分類辞書」, 「第 20

章 意味から引く辞書」, 「第 21 章 「いい」の意味論——意味と文脈——」を収める。末尾に「参考文献」, 「本書各章と既発表論文との関係」, 「あとがき」, 「索引」が付く。

(2017 年 5 月 30 日発行 くろしお出版刊 A5 判横組み 387 頁 4,600 円+税 ISBN 978-4-87424-730-3)

村上佳恵著

『感情形容詞の用法——現代日本語における使用実態——』

本書は、現代日本語の感情形容詞を対象にした文法研究の研究書である。コーパスによる計量的な検証・調査を積極的に用いており、また日本語教育における問題および応用についても具体的に論じられている点が特徴的であり、平成 27 年度に提出した博士論文「現代日本語の感情形容詞の研究」(学習院大学)を元に加筆修正を行ったものである。

本書の構成は次の通りである。「序章」に続き、「第 1 章 感情形容詞研究の軌跡」, 「第 2 章 現代日本語の形容詞分類——様態のソウダを用いて——」, 「第 3 章 イ形容詞の使用実態——感情形容詞と属性形容詞の比較——」, 「第 4 章 感情形容詞が述語となる複文——動詞のテ形, 感情形容詞——」, 「第 5 章 連体修飾用法の感情形容詞と被修飾名詞の意味関係——うれしい話, うれしい人, うれしい悲鳴——」, 「第 6 章 感情形容詞の副詞的用法」, 「第 7 章 日本語教育への応用に向けて」, 「終章 まとめと今後の課題」を収め、末尾に「参考文献」, 「初出一覧」, 「あとがき」, 「索引(事項・人名)」が付く。

(2017 年 5 月 31 日発行 笠間書院刊 A5 判横組み 295 頁 3,500 円+税 ISBN 978-4-305-70846-5)